

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

ワールドカップ開催に思うこと

間もなく、サッカーを愛する人にとって、4年に一度の夢のような日々が始まります。6月14日から7月15日までのほぼ毎日、国 vs 国のゲームが見られ、ニュースもサッカー関係ばかりとなります。特に7月6日からのベスト8以降は目が離せないゲームが続きますね。私はLIVEが好きなので、寝不足気味になるのは必至。今からわくわく感を抑えることができません。

我が全日本は、電撃的にハリル氏から西野氏へと指揮官が交代となりました。新しい指揮官を迎えての準備期間があまりにも短く懸念材料は多々あるのですが、荒療治のカンフル剤が功を奏するのを願うというか、祈っているところです。でも、あのガーナ戦をみると…。

ワールドカップで対戦する国のFIFAランキングを見ると、対戦順にコロンビア16位 セネガル28位 ポーランド10位となっています。そして、**我が全日本はというと60位**です。ちなみにガーナは50位。

ランキングだけで考えると、60位の日本がワールドカップに出場できること自体が稀有なことと捉えるべきなのかも知れません。ましてやグループリーグ2位以内で決勝トーナメントに進むのは至難の業と言わざるを得ないと思います。しかし、サッカーは実力差がそのまま出るとは限らないスポーツ。先日、本田圭佑選手がインタビューで答えていたように、「確率だけで考えると難しいが、**1%でも可能性があれば準備して臨む**」ことを、全選手が真摯に突き詰めてほしいと思います。

それにしても1998年から6大会連続でワールドカップに出場を果たし、国外で活躍する選手も増え、国内でもそれなりにサッカー熱は高まっていると思われるのに、なぜ、我が全日本の国際的な評価は低いままなのでしょうか。国際試合の結果が伴わないからなのですが、**その原因は歴代の監督や代表選手にだけにあるのでしょうか。**そうではなく、もっと奥深いところにある気がしています。

何年か前に、インターネット上で「**日本サッカーが抱える致命的な欠点**」という意見を目にしました。

掻い摘んで言うと、「**日本サッカーと世界サッカーの差は、試合に出られる環境にある**」というのです。その筆者は日本と世界（主にスペイン）の、控えや補欠選手の数と比較して、日本の控えや補欠選手の異常な多さを指摘していました。日本では小、中、高、大学のサッカー部や各年代のサッカークラブで、公式戦に出られない控えや補欠の選手が70%を超えており、高校の強豪校ではさらに割合が増えると懸念していました。

世界では、例えばスペインでは選手が30人を超えれば2チームにして公式試合に出させるのが当たり前なのに、日本は選手が何人いても、多くの選手が控えや補欠のまま、公式試合に出られる環境がないというのです。そして、この公式試合に出られる環境とそうでない環境で、小、中、高、大学を過ごした選手の累計が何万人にもなってしまうことが、世界との大きな差であり、致命的な欠点と指摘していました。

同じサッカー人口の国でも、各年代で常に公式試合に出て、ゲーム経験を積むことができる環境の国と、各年代で公式試合に出られず、控えや補欠のとして過ごす環境の国では、**国としてのサッカーの力は歴然とした差になる**というのです。

この、控えや補欠の問題には、日本サッカー協会も敏感に対応し、各種別でリーグ戦の普及や同一大会に複数チームの出場を認める等の改革を進めています。4種委員会においても、**全国少年サッカー大会が8人制となり**、各県の予選ではリーグ戦を多くして試合数を確保したり複数のチームの出場を可としたりするなど、選手の出場機会を増やす取り組みをしました。また、各県レベルでも改革は進み、例えば千葉県のアシスト大会では、最低22名登録させ、前半と後半は必ず選手を入れかえる(6年)。最低16名登録させ、3コーター制で1と2コーターは必ず選手を入れ替える(5年・4年)等の取り組みを推進しました。

しかし、このような取り組みで「日本のサッカーが抱える致命的な欠点」である「控えや補欠が異常に多

い」ことは解消されているのでしょうか。

4 種の場合で考えてみたいと思います。4 種での大きな変化は 8 人制の導入です。8 人制は、一人でも欠けたらたちまち劣勢になってしまうため、一人のやるべきことが増え、自然と攻守の切り替えが早くなります。ボールに対してずっと関わり続ける意識は、11 人制よりも育てやすいといえます。しかし、欠点は 3 名出られない子がいるということです。この点については、日本サッカー協会は多くの子を出場させるように指導者を啓蒙することで補おうとしました。

私は、**8 人制はあくまでも育成するための方法としてその良さが認められるもの**と考えていました。それを、全日本少年等の大会に導入するのは疑問でした。育成よりも勝つことに価値を求めれば、必ず走り切れる 8 人を育てる指導者が現れるのは容易に予想できたからです。日本サッカー協会に倣って、市川市でも 8 人制を大会に導入しようという意見もあり、役員会でも話題になりましたが、8 人制の大会の弊害も必ずあるから、大会への導入はしばらく様子を見ようということになりました。

さて、右の表を見て下さい。最近の全日本少年サッカー大会のデータです。2015 年に 8 人制が導入されてから、大会には登録したものの、**未出場**だった選手の割合が**年々増加**しているのがわかります。残念ながら心配していたことが、現実のものとなってしまいました。

多くの選手を出場させるように指導者を啓蒙して 8 人制の大会の欠点を補うという日本サッカー協会の手立ては効果がなく、指導者は勝利のためにベストの選手を変えない戦い方を選び、そのために、いわば**走り切れるベストの 8 名を育てる方向**に意識が向いてしまったのがわかります。

8 人制を大会に適用することで起こる弊害が顕著になりました。さらに言うと、これは本大会だけの問題ではありません。各県の予選においても同じような状況でしょう。登録していながら未出場のままの選手が日本全体でどれくらい増えているのか考えると恐ろしくなります。早急に改善していかないと、**取り返しのつかないこと**になるのではと大きな危機感を覚えます。日本サッカー協会は丁寧に検証して欲しいと思います。そして、このまま 8 人制の良さを採り、大会で継続するのであれば、多くの選手を出場させねばならないように競技規則を変更していくべきだと思います。さらに、常々問われている 4 種の段階で全国大会が必要かという点にも焦点をあて、全日本少年サッカー大会の目的を今一度見直す等、議論を深めて欲しいと思います。

世界との差を縮めるにはどうすればいいのでしょうか。先の「日本のサッカーが抱える致命的な欠点」を真摯に受け止め、4 種年代では特に「試合に出られる環境づくり」に焦点を絞り「補欠や控えを無くす」ことに専念すべきだと思います。そしてこれは、8 人制、11 人制を問わず、考えるべきことだと思います。

ゲームに出る人数が減れば、常にゲームに関わろうとする意識は高まりますが、ゲームを経験できる人数は減ってしまう。このプラスとマイナスのバランスを保ちつつ、どのように考えてマイナスを補っていくかが問われます。**理想は、その子の技量に合った人数制で大会を用意してあげる**ことですが、運営サイドから考えると、これがなかなか難しいのが現状です。

しかし、**少なくとも市川では**「日本サッカーと世界サッカーの差は、試合に出られる環境にある」という視点に立ち、松木杯等を参考に、できる限り「選手が試合に出られる環境づくり」を推進していきたいと思います。時間はかかると思いますが、もしかしたら、このように考えて運営していく市単位の協会が増えていくことが、**世界との差を縮める近道**かもしれません。

さあよいよワールドカップ。熱狂するサポーターの期待を背負った戦いが始まります。真剣勝負するプレーヤー達の最高のパフォーマンスを味わいつつ、その国ごとの選手の育成にも思いを馳せ、さらに、**日本のサッカー力を向上させるためにすべきことは何か**考えながら、ワールドカップを楽しみたいと思います。

全日本少年サッカー大会のデータ比較

項目	夏開催		冬開催	
	2013	2014	2015	2016
全員出場のチーム数	26	19	17	6
全員が 10 分以上出場のチーム数	13	5	5	1
出場選手数	668	640	627	580
未出場選手数	82	107	121	175
全員出場チームの割合	54%	40%	35%	13%
全員が 10 分以上出場のチームの割合	27%	10%	10%	2%
出場選手の割合	89%	86%	84%	76%
1 試合平均得点	3.95	3.75	4.2	3.66
1 試合平均シュート数	22.3	22.7	21.4	18.5

※出典：ジュニアサッカークリニック 2018 P59